

# 国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾 ニュース

Q. 中学生当時、「全体学習（みんなで語り合う人権学習）」をどう感じていたか？

まず、当時どう思っていたのか。

ある程度あつ場で発言することができていた私としては、クラスや学年を越えて、自分の意見に、ある時は共感してくれたり、またあるときは反論してくれたりして、一体感のようなものを感じられる場所の一つでした。

部落問題について考え、熱くなつたし、自分なりに必死にやつた気がします。

Tくんの家に、「お前んち、部落だろ」って電話がかかつてきたことを聞いたときは、「自分にもいつかこうやつて言われるときが来るのかな」って、怖い気がしてました。

でも全体学習などで上記のことを知つて、自分達がどうすべきかと考えられて良かったと思ひました。

「全体学習（みんなで語り合う人権学習）」についての追跡調査に答えてくれた彼女は、Tと共に地区対象学習会に通う、部落出身の生徒でした。

彼女は、当時Tにかかつてきた差別電話事件のことを覚え、そのことに触れて書いてきてくれました。

その、Tにかかつてきた差別電話事件とは…。

それは、Tが中学3年生になつた母の日の出来事でした。

日頃の母への感謝の気持ちを込め、Tは自宅で友人と妹と3人でカレーを作つていました。

そこに1本の電話がかかつてきます。

「はい、もしもし」

電話の主は自分を名乗ることなく、唐突に告げました。

「ちょっと調べてるんだけど、あなたのうちは同和地区ですよ。部落でしょ」

突然あびせられた言葉に呆然とするT。

Tは中学校入学以来、1年、2年と学年の部落問題学習をリードし続けてきた存在でした。同じ地区の仲間と励まし合い支え合い、その仲間の輪を広げ、学年に固い絆を作りあげてきたメンバーの1人でした。

そんなTですら、顔が真っ青になり、返す言葉が見つかりませんでした。

それでも彼は踏ん張り、切り返していきます。

「すみませんが、そんなことを訊いて何になるんですか？」

「部落なんですよ」

ひるまず返します。しかし何度問い直しても、同じ言葉を繰り返す電話の主。

「部落じゃないの、部落でしょ」

エスカレートしていきやとり痺れを切らし、Tくんは言ひます。

「そうだったらどうしたんですか」

「ブツ、ブー、ブー、ブー」

これが部落差別なのか…。

学習してきたことと、現実にぶつかる差別との違いに愕然とします。

そして思ひます。

みんなに打ち明けたい。でも、こんなことでみんなを悩ませるのはバカらしい。

こんな思いをするのは自分だけで十分だ。

…どうしてこんなことにこだわる人間がいるのか。いっそのこと人間不信になつてやろうか。

カレー作りは中断し、友人にも帰つてもらひ、彼は一人考え込みました——。